

## 『春と修羅』序

わたくしといふ現象は

仮定された有機交流電燈の

ひとつの青い照明です

(あらゆる透明な幽霊の複合体)

風景やみんなといつしよに

せはしくせはしく明滅しながら

いかにもたしかにともりつつける

因果交流電燈の

ひとつの青い照明です

(ひかりはたもちその電燈は失はれ)

これらは二十二箇月の

過去とかんずる方角から

紙と鉱質インクをつらね

(すべてわたくしと明滅し

みんなが同時に感ずるもの)

ここまでたもちつゞけられた

かげとひかりのひとくさりづつ

そのとほりの心象スケッチです

これらについて人や銀河や修羅や海胆は

宇宙塵をたべ または空気や塩水を呼吸しながら

それぞれ新鮮な本体論もかんがへませうが

それらも畢竟このころのひとつの風物です

たゞたしかに記録されたこれらのけしきは

記録されたそのとほりのこのけしきで

それが虚無ならば虚無自身がこのとほりで

ある程度まではみんなに共通いたします

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに

みんなのおのおのなかのすべてですから)

けれどもこれら新生代沖積世の

巨大に明るい時間の集積のなかで

正しくうつされた害のこれらのことはが

わづかその一点にも均しい明暗のうち

(あるいは修羅の十億年)

すではやくもその組立や質を變じ  
しかもわたくしも印刷者も

それを變らないとして感ずることは

傾向としてはあり得ます

けだしわれわれがわれわれの感官や

風景や人物をかんずるやうに

そしてたゞ共通に感ずるだけであるやうに

記録や歴史 あるいは地史といふものも

そののいろいろの論料(データ)といつしよに

(因果の時空的制約のもと)

われわれがかんじてゐるのに過ぎません

おそらくこれから二千年もたつたころは

それ相当のちがつた地質学が流用され

相当した証拠もまた次次過去から現出し

みんなは二千年ぐらゐ前には

青ぞらいつぱいの無色な孔雀が居たとおもひ

新進の大学士たちは氣圈のいちばんの上層

きらびやかな水窒素のあたりから

すてきな化石を發掘したり

あるいは白堊紀砂岩の層面に

透明な人類の巨大な足跡を

發見するかもしれませぬ

すべてこれらの命題は

心象や時間それ自身の性質として

第四次延長のなかで主張されます

大正十三年一月廿日 宮沢賢治

すばらしい大樹の緑の

生命の葉蔭に

悲嘆に魂消え

墮天の男女が立っている

はるか彼方にさ牡鹿ひとり

さびしい崖に追いつめられて

安らかな眼に海を眺めている、

あたりの繁みのなかから

しきりに繁殖する動物たちは

「二元」の世界を覗き込む

小鳥たちは人間の世界に

飛び入ったり出たりしている。

山の尾根から編隊で降りながら

銃剣を陽にぎらつかせ

小さい橋の方へ吹く風を

判断しようとしている兵隊さん。

あの政治家たちでさえも

いくらか取柄のある真理なら

弱者を相手に語っている、

必要な行為というものは

邪悪者、不義者によって行われる、

だが「判断」と「微笑」の二つのものを

和解し得るものは誰もない、

尤も創造というからには

——における——これら二つ、であるほかはない。

われわれの中間地帯の両隣りに

「短」と「長」との二つの王国があり

われわれの信を求めて相い競い

われわれの誕生から羨望を掻き立てる、

だから大空を襲撃する巨人は

激怒のあまり死を選び

われわれのうちなる英雄を呼び醒す、

とここでただ分割し、隠匿し、逃避するだけの

力しかない矮人たちは

われわれの運勢が尽きたと見ると

人間不滅の信仰へ誘惑する。

互に走り寄る恋人たちは

触れるとたんに燃えあがり、

あんな臆病な夢みたいなものに火がついて

ただ愛だけが教えてくれるものを学ぶのだ、

取り乱したベッドの上で幸福で

ブレイクの慧眼を賛美するのだ

「わたしたちはお互いから

ただ一つだけを要求する、

わたしたちは他人の風貌のただなかに

満足された欲情のみを見ねばならぬ。」

それがわたしたちの人間性だ、

他のなにもも満足させぬ。

恋人よ、あなたの眼のほかにはどこを探しても

わたしたちの学ばねばならぬもの、

わたしたちは自分だけを愛するということ

を

どこを探しても知ることはできないのです。

わたしたちのすべての恐怖が燃え尽きて

最後にわれわれは語ることができるので

「われわれの認識の最後はこういうことだ——

存在のみで充分だ、

動物の孤独であれ、愛の戯れであれ、

生きとし生けるすべてのものは

おんなど男と赤ん坊です。」

(ふかせ・もとひろ 深瀬基寛訳『オーデン詩集』せりか書房)